

# 目標の進捗状況報告書

(2013年度・大学)

担当部局は  ☆印の箇所を記入してください。

## I. 評価項目・要素と担当部局

本シートでの自己点検・評価を行う部局と項目・要素は次のとおりである。

対象部局	法学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

## II. 目標の進捗状況評価と進捗状況報告(2013.4.30現在の進捗状況報告)

### 《進捗状況評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の自己評価を行っている。進捗状況評価はA、B、C、Dの4段階とし、2013年4月30日現在における目標の達成度評価(2013年度の達成に対してどこまで進んだかの評価)を行った。A、B、C、D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。  
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。  
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。  
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 前期課程アカデミックコースの学生および後期課程の学生に対して、前期・後期課程一貫の計画的な研究指導計画を策定し、実施する。	→「前期・後期課程一貫研究指導モデルの策定」「前期課程アカデミックコース学生の研究計画書の作成」	C	C	C	C	
2. 前期課程エキスパート学生に対する複数指導教員制(副指導教員制)を効果的に実質化するための方法を検討する。	→「前期課程エキスパート学生および教員に対する副指導教員制に対するアンケート調査の実施」「拡大大学院問題検討委員会における複数指導教員制の実質化についての検討」「副指導教員の指名数」「複数指導教員による教育効果の分析」	C	C	B	B	
3. 講義科目(特に前期課程エキスパートコース科目)に対する学生の履修期待と教育内容との整合性を確保するため、法学研究科に特有のシラバス・モデルの開発を図る。	→「法学研究科シラバス検討委員会(仮称)の設置および法学研究科にふさわしいシラバスモデルの検討」「シラバスモデルの事前提示」「シラバスに対する学生の評価に関するアンケート調査の実施」	C	C	C	B	
4. 教育効果についての定期的な検証を実施するための手続を整備し、これを実施する。	→「各年度における教育方法と効果に関する学生・教員アンケートの実施」「大学院教務学生委員・副委員等と学生代表からなるFD協議会(仮称)の設置」「拡大大学院問題検討委員会における教育効果に関する検討」「各年度における検討結果の研究科委員長への報告」	C	C	B	B	

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

## 《進捗状況》 ☆

目標の進捗状況について次のとおり簡単に説明する。

目標1	2010年以降前期課程アカデミックコース入学の学生がなく課題が先送りにされてきたが、2013年度入試では3名が入学した。さしあたり、修論学位取得モデル、博士学位取得モデルに沿って指導を行っているが、修士段階での5年間の研究計画書の作成も含めた前後期一貫の研究指導モデルの必要性が増してきた。
目標2	副指導教員については制度化されており、指導教員の長期研修時に対応出来るようにはなっているが、日常的指導における効果の検証は十分には出来ていない。実質化するためにはモデル的なものが必要となろう。
目標3	シラバスについては、事前にモデルを提示することで充実してきている。院生向けアンケートも行ったが、院生にとっては、全体のイメージが掴めればよく、一回毎の細かいシラバスより、受講院生のニーズに合わせて柔軟に対応できるようなシラバスを求める学生が多く、履修を通して如何なる知識が得られるのかといった到達目標を明示することの方がむしろ重要であることが明らかとなった。
目標4	大学院教務学生委員と院生代表による大学院FD協議会を開催し、アンケートを素材に教育効果について院生と意見交換を行い、大学院運営委員会に持ち帰って検討した。拡大大学院問題検討委員会は開かず、検討結果は直接研究科長、研究科委員会に報告した。次年度は教員参加枠を拡大して、大学院運営委員全員が参加して開催する予定である。
備考	